

日本における中国画題綜覧 (二)

A Compendium of Chinese Painting Themes in Japan (3)

張 小 銅

Zhang Xiaogang

お行 (一)

おうあんせき 王安石

王安石 (1021 ~ 1086)、字は介甫、号は半山といい、撫州臨川(江西省撫州)の人である。父親は益都という名前であり、員外郎という官職を務めた。安石は子供の頃から読書が好きであり、一旦目を通した内容は一生忘れることがない。文章を作るのは素早い。はじめはほとんど考えずに書いたようだが、完成してよく見ると、実に精密であり、素晴らしい。かつて友人である曾鞏は安石の原稿を歐陽修に見せて、歐陽修が安石の文章を皆に称賛したため、進士に及第したのである。熙寧二年(1069)、参政知事を拝命し、神宗帝に「新法」の実施を建言した。帝がそれに賛成し、実施しよう命じた。しかし、民衆の負担が重くなり、それに新法反対の勢力が強かったため、新法が失敗に終わった。熙寧七年(1074)、王安石が丞相を解任された。六十六歳で亡くなった。諡は文という。著書に『王文公文集』『臨川先生文集』などがある。

【出典】

王安石、字介甫、撫州臨川人。父益都、官員外郎。安石少好讀書、一過目終身不忘。其屬文動筆如飛、初若不經意、既成、見者皆服其

精妙。友生曾鞏攜以示歐陽修、修爲之延譽、擢進士。上第簽書淮南判官、舊制秩滿許獻文求試館職、安石獨否、再調知鄆縣、起堤堰、決陂塘、爲水陸之利。貸穀與民、立息以償。俾新陳相易、邑人便之。(元・脱脱等撰『宋史』卷三百二十七、列傳第八十六)

【作例】

「王文公」(清・上官周繪『晚笑堂畫傳』、乾隆八年 [1743] 刊本)
「王安石」[「二枚」(馬場信意撰『分類畫本良材』卷八、正徳五年 [1715] 須原茂兵衛・柏屋四郎兵衛藏板)
「王安石」(文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年 [1803] 吉田新兵衛・鹿島忠兵衛・鷲頭辰三郎刊本)

おうい 王維

王維 (699 ~ 759) は、字は摩詰といい、太原の祁(山西省祁)の人である。父親の名前は處廉で、汾州の司馬という官職に終わった。王維は多才の持ち主である。彼は詩だけではなく、絵画や音楽も得意であった。彼は科擧を受ける際、唐の岐王に頼んだ。しかし公主はすでに試験官に張九臯(690 ~ 755) のことを頼んだので、王維は失望した。そこで岐王が彼に公主の前で自作の曲を琵琶で演奏させ、公主の気を引かせて、その隙間を見て公主に自分の詩作を献上するように画策した。はたして公主は気が変わり、王維を試験官に改めて依頼した

のである。開元九年(721)に進士に及第した。また、ある人が王維に『奏楽図』を見せたところ、王維はその絵の中の人は『霓裳羽衣曲』の第三疊第一拍を演奏しているところを描いているのだと言った。後に好事者が樂工にその図に基づき演奏させてみたが、王維の言う通りであった。王維はまた親孝行でよく知られる。諸官職を歴任したが、母親が逝去した際、官職を辞め、喪服をした。天寶年間(742～756)、玄宗帝(712～756在位)が巡行した際、その隙間を見て、安祿山(？～757)は長安と洛陽を攻略し陥落させた。王維が避難に間に合わず、安祿山の部下に拘束された。そこで彼が薬を飲み、わざと下痢をさせ、病気のふりをした。安祿山は王維を前からよく知っていた、洛陽まで迎え、協力を強要した。しかし、王維はやむを得ず協力せざるを得ない一方、内心では苦痛で、ひそかに玄宗帝に忠誠心を示す詩文を書いたことがある。そのため、安祿山の反乱が鎮圧された後、王維が免責され、元の官職に戻された。晩年の王維は宋之間(？～712)の鞞口にある別荘をもらい、鞞川の水辺に住み着いた。彼は詩号を「鞞川」とし、禪宗の修行に専念し、また僧侶や友人と詩の唱和を行っていた。妻が亡くなってから再び娶らず、三十年間一人で生活していた。唐の肅宗(756～762在位)の乾元二年(761)に亡くなった。年は六十一歳であった。著書に『鞞川集』、『王右丞集』がある。

【出典】

王維，字摩詰，太原祁人。父處廉，終汾州司馬，徙家于蒲，遂爲河東人。維開元九年進士擢第，事母崔氏以孝聞。與弟縉俱有俊才，博學多藝，亦齊名閭門。友悌多士推之。歷右拾遺、監察御史、左補闕、庫部郎中，居母喪，柴毀骨立，殆不勝喪服。闋拜吏部郎中。天寶末，爲給事中。祿山陷兩都，玄宗出幸，維扈從不及，爲賊所得。維服藥取痢，偽稱瘡病。祿山素憐之，遣人迎置洛陽，拘於普施寺。迫以偽署，祿山宴其徒於凝碧宮，其工皆梨園弟子，教坊工人。維聞之悲側，

潛爲詩曰，萬戶傷心生野煙，百官何日再朝天。秋槐花落空宮裏，凝碧池頭奏莞絃。賊平，陷賊官三等定罪，維以凝碧詩聞于行在，肅宗嘉之會經請削己刑部侍郎，以贖兄罪。特宥之責，授太子中允。乾元中，遷太子中庶子中書舍人，復拜給事中，轉尚書右丞。維以詩名盛於開元。天寶間，昆仲宦遊兩都，凡諸王駙馬，豪右貴勢之門，無不拂席迎之。寧王、薛王待之如師友。維尤長五言詩，書畫特臻其妙。筆蹤措思，參於造化，而創意經圖，即有所缺，如山水平遠，雲峯石色，絕跡天機，非繪者之所及也。人有得奏樂圖，不知其名，維視之曰，霓裳第三疊第一拍也。好事者集樂工按之，一無差。咸服其精思。維弟兄俱奉佛，居常蔬食，不茹葷血。晚年長齋，不衣文綵。得宋之間藍田別墅在鞞口，鞞水周於舍下，別漲竹洲花塢，與道友裴迪浮舟往來，彈琴賦詩，嘯詠終日。嘗聚其田園，所爲詩號鞞川集。在京師，日飯十數名僧，以玄譚爲樂。齋中無所有，唯茶鐺、藥臼、經案、繩床而已。退朝之後，焚香獨坐，以禪誦爲事。妻亡不再娶，三十年孤居一室，屏絕塵累，乾元二年七月卒。(後晉・劉昫等撰『舊唐書』卷一百九十下，列傳第一百四十下)

王維右丞年未弱冠，文章得名。性閒音律，妙能琵琶。遊歷諸貴之間，尤爲岐王之所眷重。時進士張九臯聲稱籍甚，客有出入公主之門者，爲其致公主邑詞牒京兆試官，令以九臯爲解頭。維方將應舉，具其事言於岐王，仍求庇借。岐王曰，貴主之強，不可力爭，吾爲子畫焉。子之舊詩清越者可錄十篇，琵琶新聲之怨切者可度一曲。後五日詣此。維即依命，如期而至。岐王謂曰，子以文士請謁貴主，何門可見哉。子能如吾之教乎。維曰，謹奉命。岐王乃出錦繡衣服，鮮華奇異。遣維衣之。仍令賚琵琶，同至公主之第。岐王入曰，承貴主出內，故攜酒樂奉讌。即令張筵。諸伶旅進。維妙年潔白，風姿都美，立於前行。公主顧之，謂岐王曰，斯何人哉。答曰，知音者也。即令獨奉新曲。聲調哀切，滿座動容。公主自詢曰，此曲何名。維起曰，號鬱輪袍。

公主大奇之。岐王因曰、此生非止音律。至於詞學、無出其右。公主尤異之。則曰、子有所爲文乎。維則出獻懷中詩卷。公主覽讀驚駭曰、此皆我素所誦習者、常謂古人佳作、乃子之爲乎。因令更衣、升之客右。維風流蘊藉、語言諧戲、大爲諸貴之欽矚。岐王因曰、若使京兆今年得此生爲解頭、誠爲國華矣。公主乃曰、何不遣其應舉。岐王曰、此生不得首薦、義不就試。然已承貴主論託張九臯矣。公主笑曰、何預兒事、本爲他人所託。顧謂維曰、子誠取解、當爲子力。維起謙謝。公主則召試官至第、遣宮婢傳教。維遂作解頭、而一舉登第。（唐・薛用弱撰『集異記』）

【作例】

「王維」（清・顧沅輯『古聖賢像傳略』卷七、道光一〇年〔1830〕刻本）

「王摩詰」（清・上官周繪『晚笑堂畫傳』、乾隆八年〔1743〕刊本）
 「王維」（狩野探幽繪『詩仙堂志』詩仙圖録、萬治二年〔1659〕序刊本）

「王維」（普齋岡子雉著述「大岡普齋」、橋辨次守国「橋辨次」圖畫『畫典通考』卷六、享保一二年〔1727〕寶文堂刊本）

「王維」（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年〔1803〕吉田新兵衛・鹿島忠兵衛・鷲頭辰三郎刊本）

おううんし 王蘊之

蘭亭四十二人（四十三人）の一人である。

【出典】

↓「蘭亭四十二賢圖」、「蘭亭四十三賢圖」

【作例】

「王蘊之」（文鳳山人「文鳳駿聲」『文鳳畫譜』三編、文化八年〔1811〕河内屋・吉田屋刊本）

おういつししょう 王逸少

↓「王羲之」

【作例】

「王逸少」（橋有税『繪本故事談』卷一、正徳四年〔1714〕稱航堂刊本）

「王逸少」（橋有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷四、享保四年〔1719〕寶文堂刊本）

「王逸少」（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年〔1803〕吉田新兵衛・鹿島忠兵衛・鷲頭辰三郎刊本）

おううぐん 王右軍

↓「王羲之」

おうえん 王延

王延、字は子玄、または子元といい、扶風始平（陝西省興平）の人である。九歳から道教の修行をはじめたが、西魏の大統三年（537）に道教に入った。十八歳の頃、真人李順興と仲良く、また崑山真人焦呖に師事し、共に石室に泊まり、松の実を食べ、山の水を飲んでた。後に北周の武帝（561～578）が彼を慕って使者を派遣して訪ねた。焦呖は彼を応じるよう説得したので、延は都に行った。しばらくして西嶽に帰りたいと申し出て、許可された。雲臺観に住み着いた。北周の武帝は彼のために観を修理するよう命令を下した。山の高處に土が少ないので、運ぶのに苦労する。遠は玄真子に祈ると、観の側の岩から土が湧いてきた。いくら取っても湧いてくる。また、山の上に油がないので、延は一つの甕を置いたら、一晚で自ら一杯になる。一年中灯油を使っても無くなることはない。客が訪ねてくると、二羽の青鳥

が先に飛んできて知らせる。北周の武帝は雲臺觀から八人の道士を選び、延と共に道教の大義を広げるよう命じた。また通道觀を置き、延に焦暎が残された『三洞経図』を校正するよう命じた。延は珠囊七つを作り、経、傳、疏、論およそ八千三十巻の經典を通道觀に保存するよう奏上した。そこで、道教が盛んに広がった。隋の文帝(589-604)が即位した時、玄都觀を置き、延を觀主とする。仁壽四年(604)、延は門下生に告げた。「私は西嶽に戻りたいが、おそらく帝が承知しないだろう」と。その年の九月に延が玄都觀で亡くなった。亡骸が柔らかくて奇異な香りを発散する。帝が西嶽に埋葬するよう命じた。しかし、埋葬された際、棺が空っぽになっていた。

【出典】

王延字子玄、扶風始平人也。九歲從師、西魏大統三年丁巳入道、依貞懿先生陳君寶熾、時年十八、居於樓觀、與真人李順興特相友善。又師華山真人焦曠、共止石室中、餐松飲泉、絕粒幽處。後周武帝欽其高道、遣使訪之。焦君謂曰、世道陵夷、佇師拯援、可應詔出、以弘大法、吾自此逝矣。延來至都下、久之、請還西嶽、居雲臺觀。周武詔修所居觀宇、以山高無土、運取爲勞、延默告玄眞、願有靈貺。忽於觀側巖間涌土、取之不竭。又山上無油、延置一甕爲貯燈油之器、一夕自滿、累歲然燈、用之不減。既居山頂、杜絕人寰、每有人來、賓客將至、即有二青鳥先來報之。其鳥如鳥、常飛左右。延每登仙掌蓮峯、攝衣前行、如履平地、常有猛獸馴衛。所止其三洞、玄與眞經玉書、皆焦君所留、俾後傳於世。周武以沙門邪濫、大革其訛、玄教之中、亦令澄汰。而素重於延、仰其道徳、又召至京、探其道要。乃詔雲臺觀精選道士八人、與延共弘玄旨。又勅置通道觀、令延校三洞經圖、緘藏於觀內。延作珠囊七巻、凡經傳疏論八千三十巻、奏貯於通道觀藏。由是玄教光興、朝廷以大象紀號。至隋文禪位、置玄都觀、以延爲觀主、又以開皇爲號。六年丙午、詔以寶車迎延於大興殿、帝

潔齋請益受智慧大戒。于時丹鳳來儀、飛止壇殿。詔以延爲道門威儀、之制自延始也。蘇威、楊素皆北面執弟子之禮。仁壽四年告門人曰、吾欲歸止西嶽、但恐帝未悉爾。是年九月委化於玄都觀、體柔香潔、儼然如生。白鶴羣飛、彩霧徊合、異香之氣、聞於遠近。煬帝初即寶位、聞之尤加歎異、賜物百段、錢二十萬、設三千人齋、送還西嶽。所至之處、奇香異雲、連屬不散。入壙之日、但空棺而已、得化解之妙焉。(宋・張君房撰『雲笈七籤』卷八十五)

王延、字子元、扶風人。九歲即好道。師焦曠真人。授三洞秘訣。惟松澆水飲。周武帝召至都。久之得請還山。嘗寓西嶽。乏油乃置一器。經夕自滿。凡賓客將至。先有二青鳥報之。居處常有虎豹馴遠。若相保衛。隋文帝禪位。置仙都觀。詔延主之。仁壽四年春。謂門人曰。吾欲歸西嶽。但恐上未許。乃委化於仙都觀。帝遣使護葬於西嶽。及就壙。但空棺而已。(明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷五)

【作例】

「王延」(明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷五、萬曆二八年 [1600] 刊本)

「王延」(文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年 [1803] 吉田新兵衛・鹿島忠兵衛・鷲頭辰三郎刊本)

「王延」(普齋岡子雉著述『大岡普齋』、橋辨次守国「橋辨次」圖畫『畫典通考』卷六、享保一二年 [1727] 寶文堂刊本)

おうえんふうかん 王衍風鑒

王衍(266-311)は、字は夷甫といい、瑯邪臨沂(山東省臨沂)の人である。彼は美男子で、文才がある。老子、莊子の学問が好きで、自分を子貢にたとえる。「風鑒」とは風格と見識とのことである。(『漢語大詞典』第十二巻、漢語大詞典出版社、二〇〇一年) 彼が子供の頃、晋の七賢人の一人である山濤(265-283)を訪ねたことがある。彼

が帰った後、山濤は「どんな婆がこのようなかわいい子を産んだらう。しかし天下の人々を不幸に巻き込むのはこの人じゃないとは限らないだろう」と嘆いた。結局彼が後趙(319～352)の明帝石勒(319～333在位)に殺された。(唐・房玄齡等撰『晋書』卷四十三、列傳第十三)

【出典】

〔晋書〕衍字夷甫，神情明秀，風姿詳雅。總角嘗造山濤，濤嗟歎良久，既去，目送而之曰，何物老嫗，生寧馨兒。然誤天下蒼生者，未必非此人。武帝聞其名，問其從兄戎曰，夷甫當世誰比。戎曰，未見其比，當從古人中求耳。補元城令，終日清談，縣務亦理。衍有盛才美貌，明悟若神，常自比子貢。聲名藉甚。喜空言，惟談老莊爲事。每捉玉柄麈尾，與手同色。義理有所不安，隨即改更，世號口中雌黃。朝野翕然，謂之一世龍門。累居顯職，後進景慕。歷尚書令，及石勒寇京師，以衍都督征討諸軍事，遷太尉。衆共推爲元帥。舉軍爲勸所破。衍欲求自免，勸勒稱尊號。勒怒曰，君名蓋四海，身居重任，少壯登朝，至於白首。何得言不豫世事邪。使人夜排墻填殺之。(唐・李翰撰『蒙求』)

【作例】

「王衍風鑿」(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編卷五、享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行)

おうかいけい 王会稽

↓「王羲之」

おうかせきが い 王果石崖

將軍王果が益州(四川省成都)太守として赴任する途中、三峽を通る。船から長江の岸壁に棺は懸かっているのが見える。そこで、王果

は部下を遣って見に行くと、中には骸骨がある。また石に「三百年後、水が私を流す。長江まで流されて崖から落ちそうなき、王果という人に出会う」との銘文がある。王果がその銘文を見ると悲しくなり、「何と数百年前にすでに私の名前を知っているね。このままではほっとけない」と。そのため残って骸骨を埋葬して、葬儀を済ませてから任地へ出発したという。

【出典】

〔神怪志〕將軍王果爲益州太守，路經三峽，船中望見江崖，石壁千丈，有物懸在半崖。似棺椁。問舊行人，皆云已久。果使人懸崖就視，乃一棺也。骸骨存焉。有石誌。云，三百年後，水漂我，欲及長江，垂欲墮，遇王果。果見銘愴然曰，數百年前知我名。如何舍去。因留，爲營斂瘞埋，設祭而去。(唐・李翰撰『蒙求』)

【作例】

「王果石崖」(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷三、享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行)

おうかんし 王渙之

王渙之は蘭亭四十二人(四十三人)の一人である。

【出典】

↓「蘭亭四十二賢圖」、「蘭亭四十三賢圖」

【作例】

「王渙之」(文鳳山人『文鳳駢聲』『文鳳畫譜』三編、文化八年 [1811] 河内屋・吉田屋刊本)

おうきし 王徽之

王徽之(？～386)は王羲之の五男である。字は子猷といい、瑯邪臨沂(山東省臨沂)の人である。性格はおおらかで、自由奔放である。

かつて大司馬桓温の参軍になった頃、頭がぼさぼさで、仕事をしなかった。また、車騎桓冲の騎兵参軍になった頃、冲は彼に聞いた。「あなたはどの部署に所属しているか。」と。彼は「馬の部署のようだ。」と答えた。「何匹の馬を管理しているか。」と。「馬さえ知らないのに、どうやって数がわかるか。」と。「馬は何匹が死んだか。」と。「生きている奴さえ知らないのに、どうやって死んでいるのがわかるか。」と。ある時、呉中のある士大夫の家にいい竹が植えていると聞き、観たいと主人に申し出た。そこでかごに乗って竹の庭に直行した。竹の下でしばらく声を出して詩吟した。主人は掃除して座ってもらおうとしたが、徽之は見向きもしなかった。結局、帰るまで主人がほったらかされたが、徽之は満足して帰った。かつて徽之は人の空き家を借りて住んだが、庭に竹を植えるよう命じた。ある人がそのわけを尋ねたが、徽之はひたすら声を出して詩吟をしてから、竹を指して言った。「この君子は一日ないと困る。」と。かつて山陰に住んだ頃、ある晩のことだが、雪が止んで、透きとおった夜空の中で、穏やかな月光が万物を覆っていた。徽之は酒を飲みながら、左思の『招隱』の詩を詠んだ。ふと親友戴安道（逵）のことを思い、早速小舟に乗り、戴逵の家に向かった。その時、戴安道は剡溪というところに住んでいたため、小舟は一晚がかかってやっと辿り着いた。しかしながら、徽之は急に気が変わった。戴安道の家に入らずに戻ってきた。ある人がそのわけを尋ねると、徽之は、「興に乗じてきたので、興を尽くしたので、帰る。戴逵に会うなどの必要がないのだ。」と答えた。後に献之と対面したが、泣かなかつた。ただ献之の側に座り、献之が残された琴を弾こうとしたが、なかなかうまく行かなかつた。徽之はため息をしながら「人も琴も共に亡くなってしまった。」とつぶやいた。前に背中の病気があり、ついに崩された。一ヶ月余りの後、徽之も世を去った。

【出典】

徽之字子猷。性卓犖不羈，爲大司馬桓温参軍，蓬首散帶，不綜府事。又爲車騎桓冲騎兵参軍，冲問，卿署何曹。對曰，似是馬曹。又問，管幾馬。曰，不知馬。何由如數，又問，馬比死多少。曰，未知生，焉知死。嘗從冲行，值暴雨，徽之因下馬排入車中，謂曰，公豈得獨擅一車。冲嘗謂徽之曰，卿在府日久，比當相料理。徽之初不酬答，直高視，以手版柱頰云，西山朝來致有爽氣耳。時吳中一士大夫家有竹，欲觀之，便出坐與造竹下，諷嘯良久。主人灑掃請坐，徽之不顧。將出，主人乃閉門，徽之便以此賞之，盡歡而去。嘗寄居空宅中，便令種竹。或問其故，徽之但嘯詠，指竹曰，何可一日無此君邪。嘗居山陰，夜雪初霽，月色清明，四望皓然，獨酌酒詠左思招隱詩，忽憶戴逵，逵時在剡，便夜乘小船詣之，經宿方至，造門不前而反。人問其故，徽之曰，本乘興而行，興盡而反，何必見安道邪。雅性放誕，好聲色，嘗夜與弟猷之共讀高士傳讚，猷之賞井丹高潔，徽之曰，未若長卿慢世也。其傲達若此。時人皆欽其才而穢其行。後爲黃門侍郎，棄官東歸，與猷之俱病篤。「中略」未幾，猷之卒，徽之奔喪不哭，直上靈牀坐，取猷之琴彈之，久而不調，歎曰，嗚呼子猷，人琴俱亡。因頓絕。先有背疾，遂潰裂，月餘亦卒。（唐・房玄齡等撰『晉書』卷八十，列傳第五十）

【作例】

「王徽之」（『任渭長畫傳四種』於越先賢傳、中国古畫譜集成第四卷、山東美術出版社、2000年）
 「王徽之」（文鳳山人『文鳳駿聲』『文鳳畫譜』三編、文化八年〔1811〕河内屋・吉田屋刊本）
 ↓「蘭亭四十二賢圖」、「蘭亭四十三賢圖」、「王子猷」

おうぎし 王羲之

王羲之（303～379）、字は逸少という。祖父の名前は正といい、尚書郎であった。父親は暁といい、淮南太守であった。十三歳の頃、嘗て周顛（269～322）に会った際、顛は彼を觀察して驚いた。丁度牛心を炙つているところ、客の皆さんがまだ食べていないのに、顛は先に切つて王羲之に食べさせた。そのため、王羲之が有名になった。また、太尉郗鑒が門生を司徒王導（276～339）のところに婿をもらうよう頼みに行った。王導は門生を東に見に行かせた。門生は帰つてから鑒にこう伝えた。「王氏の子供たちは皆よろしいが、一人だけ東牀でお腹を出して何かを食べて、何も知らない振りをしていた。」と。鑒は「まさにこの子は良い婿だ」といい、訪ねてみると、それはすなわち王羲之のことであった。そこで、娘を嫁がせた。後に秘書郎、征西將軍參軍、長史、右將軍會稽内史歴任し、晋穆帝太元四年（379）に亡くなった。五十九歳であった。王羲之は書道に長け、「書聖」と呼ばれ、その名高い『蘭亭序』は彼の代表作である。梁が混乱した際、流出した。陳の天嘉（560～566）年間、僧永がそれを得た。陳の太建（569～582）年間、それを陳の宣帝に献上した。後に隋（589～618）が陳を滅ぼした日に、ある人がそれを晋王に献上した。晋王はそれを大切にしなかった。後に僧果は帝に借りて拓本を作つたが、帝に返さなかった。僧果が亡くなった後、弟子僧辨がそれを受け継いだ。唐の太宗が秦王だった頃、拓本を見て、大変驚いて喜んでいた。高僧を出して真蹟を買い求めたが、見つからなかった。後に僧辨が真蹟を保存しているのを聞き、蕭翊を派遣してもらつてきた。武徳四年（621）、秦府に入れた。貞観十年（636）、太宗が十冊の拓本を作り、側近に配った。貞観二十三年（649）、太宗が崩御した。中書令褚遂良が「蘭亭は先帝が重宝にしたものであり、残してはいけない。」という旨の上奏文を出した。そのため、『蘭亭序』は副葬品として昭陵に葬られたと伝えられている。

【出典】

王羲之、字逸少、司徒導之縱子也。祖正、尚書郎。父暁、淮南太守。元帝之過江也、曠首創其議。羲之幼訥於言、人未之奇。年十三、嘗謁周顛、顛察而異之。時重牛心炙、坐客未噉、顛先割啗羲之、於是始知名。及長、辯瞻以骨鯁稱、尤善隸書、爲古今之冠。論者稱其筆勢、以爲飄若浮雲、矯若驚龍、深爲從伯敦、導所器重。時陳留阮裕有重名、爲敦主簿。敦嘗謂羲之曰、汝是吾家佳子弟、當不減阮主簿。裕亦目羲之與王承、王悅爲王氏三少。時太尉郗鑒使門生求女婿於導、導令就東廂徧觀子弟。門生歸謂鑒曰、王氏諸少並佳、然聞信至、咸自矜持。惟一人在東牀坦腹食、獨若不聞。鑒曰、正此佳婿邪。訪之、乃羲之也。遂以女妻之。起家秘書郎、征西將軍庾亮請爲參軍、累遷長史。「中略」年五十九卒、贈紫光祿大夫。（唐・房玄齡等撰『晋書』卷八十、列傳第五十）

王右軍蘭亭序、梁亂出在外、陳天嘉中爲僧永所得。至太建中、獻之宣帝。隋平陳日、或以獻晉王、王之寶。後僧果從帝借搨。及登極、竟未從索。果師死後、弟子僧辨得之。太宗爲秦王日、見搨本驚喜、乃貴價市大王書蘭亭、終不至焉。及知在辯師處、使蕭翊就越州求得之、以武徳四年入秦府。貞観十年、乃搨十本以賜近臣。帝崩、中書令褚遂良奏、蘭亭先帝所重、不可留。遂秘於昭陵。（唐・劉餗撰『隋唐嘉話』卷下）

【作例】

「王羲之」(明・天然撰『歷代古人像讚』弘治十一年〔1498〕重刻本)
 「王逸少像」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物五卷、萬曆三十七年〔1609〕刊本)
 「墨池」(明・程大約撰『程氏墨苑』卷六、萬曆三十二年自序、萬曆二十一～三十七年〔1594～1609〕滋蘭堂刊本)
 「無題」〔墨池〕(明・方瑞生輯、鄭重、魏之璜繪『方瑞生墨海』、萬

曆四六年 [1618] 刊本)

「王右軍」(清・上官周繪『晚笑堂畫傳』、乾隆八年 [1743] 刻本)

「晋右軍將軍會稽內史王公羲之」(清・王齡撰、任熊繪『於越先賢像傳讚』卷上、咸豐六年 [1866]、養和堂刻本)

「無題」[王羲之]、『點石齋叢書』、光緒十一年 [1885] 序、上海點石齋書局石印本)

「王羲之」(橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷二、貞享五年 [元祿一、1688] 刊本)

「王羲之」(某岡之繪『繪圖の林』卷上、元祿二年 [1689] 長置堂梓板)

「王羲之像」(橘守國繪『繪本直指寶』卷三、延享一年 [1744] 叙、延享二年 [1745] 稱光堂板、須原屋・柏原屋刊行)

「王羲之」(大岡道信繪『押繪手鑑』卷中、元文一年 [1736] 稱光堂登梓、洪川清右衛門版)

「王羲之」(蕙齋北尾政美『諸職畫鑑』、寛政六年 [1794] 須原屋板)

「王羲之」[見山筆] (高木某撰『本朝畫林』卷上、寶曆一年 [1752] 序刊本)

「王羲之」(老蓮先生著『畫圖醉芙蓉』上卷、享和三年 [1803] 序、文化六年 [1809]、青藜閣刻本)

おうぎのつむぎる 王吉去

「王吉去」は「王吉去婦」といい、また「王吉逐婦」ともいう。

王吉、字は子陽といい、琅邪皋虞(山東省即墨北東)の人である。若い頃、王吉は勉強が好きであった。五経に精通する。王吉の東の隣に棗の木があり、その枝が王吉の庭に垂れているため、王吉の妻がその棗を取ってきて王吉に食べさせた。後に王吉がそれを知り、妻を家か

ら追い出した。隣の人がそれを聞き、木を伐採しようとしたが、皆がそれを止め、王吉を説得して妻を戻らせた。

【出典】

王吉字子陽、瑯邪皋虞人也。「中略」吉少時學問、居長安。東家有棗樹垂吉庭中、吉婦取棗以啖吉。吉後知之、乃去婦。東家聞而欲伐其樹、鄰里共止之、因固請吉令還婦。里中爲之語曰、東家有樹、王陽去。東家棗完、去婦復還。其勵志如此。(漢・班固撰『漢書』卷七十二、王貢兩龔鮑傳第四十二)

王吉、瑯琊人。東隣有棗垂吉庭、妻取之以啖之。吉逐出其妻、鄰人知爲棗故、欲伐其樹、鄰里止之、爲之迎婦歸、漢宣帝拜吉諫議大夫、終身非義不取。(明・張瑞圖撰『日記故事大全』卷六)

【作例】

「王吉去」(橘宗重著、長谷川等雲繪『増補繪本寶鑑』卷一、享保年間 [1716 ~ 1736] 刊本)

おうぎよう 王喬

王喬は、河東(山西省夏の北西)の人である。漢の明帝(57 ~ 75 在位)の頃、王喬は尚書郎であった。後に向向して葉県の県令となった。漢の法律によると、畿内の地方長官は毎月の朔望の日(一日と十五日)に来朝しなければならぬ。そのために、王喬は毎月の朔望の日に朝廷に来る。しかしながら、いつも馬車が来る気配が見られない。そのため、帝が不審に思い、密かに太史令に見張っていた。その時、東南の方向から二羽の鳧が飛んできた。太史令が網で一羽を取った。よく見ると、帝が尚書官に賜った靴であった。王喬が来朝の度に葉県の太鼓が自ら鳴る。その音は都まで届いた。ある日、空から玉棺が役所の中庭まで降りてきた。役人たちが一所懸命に動かそうとしたが、ちっとも動かなかつた。王喬は「天帝が私を招いているじゃないか。」

といい、沐浴して着替えて、棺に入った。すると、棺の蓋がいきなり覆った。城東に埋葬したが、土が自ら墳丘となった。その晩、県内の牛が皆汗をかきながら、喘いでいた。地元の人々が彼のために祠を立て、「葉君祠」という。王喬は、実は王子喬という説もある。

【出典】

漢明帝時、尚書郎河東王喬爲葉令、喬有神術、每月朔、嘗自縣詣臺、帝怪其來數而不見車騎、密令太史伺望之、言其臨至時、輒有雙鳧從東南飛來、因伏伺見鳧、舉羅張之、但得一隻鳥、使尚書識視、四年中所賜尚書官屬履也。(晉・干寶『搜神記』卷一)

王喬者、河東人也。顯宗世。爲葉令。喬有神術、每月朔望、常自縣詣臺。帝怪其來數而不見車騎、密令太史伺望之。言其臨至、輒有雙鳧從東南飛來。於是侯鳧至。舉羅張之。但得一隻鳥焉。乃詔尚方你(非人字邊、是言字邊)視。則四年中所賜尚書官屬履也。每當朝時、葉門下鼓不擊自鳴、聞於京師。後天下玉棺於堂前、吏人推排、終不動搖。喬曰、天帝獨召我耶。乃沐浴服飾寢其中。蓋便立覆。宿昔葬於城東、土自成墳。其夕、縣中牛皆流汗喘乏、而人無知者。百姓乃爲立廟、號葉君祠。牧守每班錄。皆先謁拜之。吏人祈禱、無不如應。若有違犯、亦立能爲祟。帝乃迎取其鼓。置都亭下、略無復聲焉。或云此即古仙人王子喬也。(南朝宋・范曄撰『後漢書』卷八十二上、方術列傳第七十二)

【作例】

〔王喬〕(明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷三、萬曆二八年 [1600] 刊本)
 〔王喬〕(橋有税『繪本故事談』卷六、正徳四年 [1714] 稱觥堂刊本)
 〔王喬〕(林守篤編述『畫筌』卷四、正徳二年 [1712] 序、享保六年 [1721] 保壽堂・養心堂刻本)
 〔王喬〕(寂照主人月僊寫並題『列仙圖贊』三、天明四年 [1784] 寂

照寺藏板)

おうぎょうそつふ 王喬雙鳧

↓〔王喬〕

【出典】

後漢王喬河東人。爲葉令。喬有神術。每月朔望、常自詣臺朝。顯宗怪其來數而不見車騎、密令太史伺望之。言其臨至、輒有雙鳧、自南飛來。於是候鳧至、舉羅張之、但得一隻鳥焉。後天下玉棺於堂前。喬曰、天地獨召我耶。乃沐浴服飾寢其中。蓋便立覆。葬於城東。百姓爲立廟、號曰葉君祠。(唐・李翰撰『蒙求』)

【作例】

〔王喬雙鳧〕(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷四、享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行)

おうぎょうし 王凝之

王凝之は王羲之の子息であり、蘭亭四十二人(四十三人)の一人である。

【出典】

次凝之、亦工草隸、仕歷江州刺史、左將軍、會稽內史。王氏世事張氏五斗米道、凝之彌篤。孫恩之攻會稽、僚佐請爲之備。凝之不從、方入靖室請禱、出語諸將佐曰、吾已請大道、許鬼兵相助、賊自破矣。既不設備、遂爲孫恩所害。(唐・房玄齡等撰『晉書』卷八十、列傳第五十)

↓〔蘭亭四十二賢圖〕、〔蘭亭四十三賢圖〕

【作例】

〔王凝之〕(文鳳山人『文鳳駢聲』『文鳳畫譜』三編、文化八年 [1811] 河内屋・吉田屋刊本)

おうきよさんにゅう 應璩三人

應璩(190～252)は、字は休璩といい、汝南(河南省汝南)の人である。大將軍長史曹爽が屢々違法のこゝをするので、應璩は詩を作つて彼を風刺した。中には「問我何功德、三人承明廬」(何の取り柄かわれ持ちて、三たび侍れる承明廬云々)『蒙求』下(新釈漢文大系、明治書院)の「語釈」によると、「三人は應璩が初め侍郎、次に常侍、終わりに侍中になつた故にいう。承明廬は天子に謁見して詔制を承る所で、翰林院内にある」との説明がある。(晉・陳壽撰『三国志』魏志卷二十一注(一))

【出典】

文章敘録、應璩字休璩、汝南人。博學好屬文。魏明帝世、歷散騎常侍。齊王卽位、遷侍中。大將軍長史曹爽秉政、多違法度。璩爲百一詩以諷焉。其略曰、前者墮官去、有人適我聞、田家無所有、酌醴焚枯魚、問我何功德、三人承明廬。其言雖頗諧合、多切世要。世共傳之。(唐・李翰撰『蒙求』)

【作例】

「應璩三人」(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷九、享和元年[1801]序刊本、河内屋等發行)

おうげい 王倪

王倪は老君の弟子である。伏羲と神農の頃、道を得た。黄帝が彼に道を聞いたことがある。少昊と顓頊の時代を経て、よく人間の世界をまわる。帝嚳以前、鬻歛の師であつた。飛行術が得意である。堯と舜の頃、まだ彼を見かけた人がいた。後に天に昇つた。

【出典】

王倪、即老君弟子。得道於羲農之間。黄帝過之、因傳道要。歷少昊

顓頊之世。常遊人間。帝嚳以前。爲鬻歛師。行飛走之道。堯舜之時。猶有見者。後昇天。(明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷一)

【作例】

「王倪」(明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷一、萬曆二十八年[1600]刊本)

「王倪」(晉・皇甫謐撰、清・任熊繪『高士傳』、咸豐八年[1858]養和堂刻本)

「王倪」(林守篤編述『畫筌』卷四、正徳二年[1723]序、享保六年[1791]保壽堂・養心堂刻本)

「王兒(倪)」(寂照主人月僊寫並題『列仙圖贊』一、天明四年[1784]寂照寺藏板)

おうけんついでしや、ちよえんらくすい

王儉墜車、褚淵落水

『南史』によると、齊の司徒である褚淵が湘州刺史の王僧虔を見送る際、道路が崩壊したため、落水した。僕射の王儉が驚いて馬車から落ちてしまった。同行した謝超宗が二人を見て拍手しながら、「落水の三公、墜車の僕射」と言った。三公とは司徒、司空、司馬といった皇帝に仕える御三家である。

【出典】

南史、齊司徒褚淵字彥回。因送湘州刺史王僧虔、閭道壞落水。僕射王儉驚跳下車。謝超宗抵掌笑曰、落水三公、墜車僕射。彥回出水、露濕狼藉。超宗先在僧虔舫。抗聲曰、有天道焉、天所不容。有地道焉、地所不受。投畀河伯、河伯不受。彥回大怒曰、寒士不可遜。超宗曰、不能賣袁劉得富貴。焉免寒士。儉字仲寶、祖曇首、父僧綽、俱爲侍中。儉幼篤學。丹陽尹袁粲見之曰、宰相之門、枯柏豫章、雖小已有棟樑氣矣。終當任人家國事。仕至中書監。(唐・李翰撰『蒙

求）

【作例】

「王儉墜車、楮淵落水」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷十、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行）

おうげん 王玄（之）

王玄は王玄之の誤りである。王玄之は蘭亭四十二人（四十三人）の一人である。

【出典】

↓「蘭亭四十二賢圖」、「蘭亭四十三賢圖」

【作例】

「王玄」（文鳳山人「文鳳駿聲」「文鳳畫譜」三編、文化八年〔1811〕河内屋・吉田屋刊本）

おうこう 王洽

王洽はどういう人かはわからない。墨を紙面にかけて絵を作るのが得意である。酒が好きで、さっぱりしている性格である。よく各地を放浪する。絵を作る度に、必ず酔っぱらった後にする。服を脱ぎ、歌いながら墨を画布にかけ、形にする。或いは山に、或いは石に、或いは林に、或いは泉にする。まさに自然そのもので、人工の痕跡が見られない。

【出典】

王洽、不知何許人。善能潑墨成畫。時人皆號爲王潑墨。性嗜酒。疏逸。多放傲於江湖間。每欲作圖畫之時。必待沈酣之後。解衣盪（石字邊）礴，吟嘯鼓躍，先以墨潑圖幃之上，迺因似其形象。或爲山，或爲石，或爲林，或爲泉者，自然天成，倏若造化。已而雲霞卷舒，煙雨慘淡。不見其墨汚之跡。非畫史之筆墨所能到也。（無名氏『宣

和畫譜』卷十）

【作例】

「王洽」（橋有税『繪本故事談』卷四、正徳四年〔1714〕稱觥堂刊本）

おうこうだんかん 王貢彈冠

前漢の蕭育は、哀帝の頃の光祿大夫であった。若い頃彼が陳咸、朱博と親交があり、後に王陽と貢禹とも親友となった。彼らは出世の道で互いに提携しあう。故に長安で蕭育と朱博が任官されると、王陽と貢禹が冠を用意して祝いあうという。成語では「彈冠相慶」ともいう。

【出典】

前漢 蕭育字次君，東海 蘭陵人。哀帝時爲光祿大夫執金吾。少與陳咸、朱博爲友。著聞當世。往者有王陽、貢禹。故長安語曰、蕭朱結綬，王貢彈冠。言其相薦達也。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「王貢彈冠」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷六、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行）

おうさん 王粲

王粲（177～217）、字は仲宣といい、山陽高平（山東省鄒）の人である。曾祖父、祖父は皆かつて漢代の三公だったという名門の出身であり、父親も大將軍何進の長史であった。何進は、王一族が名門である故に、姻戚を結びたかった。父親はそれに応じず、病気の口実で官を辞め、最後に家で亡くなった。漢の獻帝が長安に移った際、王粲も長安について行った。そこで、中郎將蔡邕に会った。蔡邕は彼を一目に置いた。時に、蔡邕は大学者であり、朝廷の重臣でもある。家には賓客が絶えなかった。にもかかわらず、王粲が来たのを聞き、慌てて靴を逆さまに履いて出迎えた。粲は若くて、体も小さかった。一座の

賓客が皆驚いた。邕は言った。「此の方は王公の孫で、大変才能のある方です。私は彼ほどの才能を持っていません。我が家の書物はすべて彼にあげるべきです。」と。魏の侍中を務め、典章制度の拡充に大きな役割を果たした。粲は記憶力が抜群である。かつて人と一緒に歩き、道そばに石碑がある。ある人は粲に聞いた。「あなたは暗誦できるか」と。粲は即座に暗誦した。一文字も間違いなかった。人が囲碁を遣っているのを見ているうち、片方が追い込まれる局面になり、粲は挽回させた。頭が切れて、計算も文章も人に追隨を許さない。建安二十二年(217)の春、王粲は呉を征伐する道中で四十一歳の若さで病死した。王粲は文学史において「建安七子」の中の一人である。

【出典】

王粲字仲宣，山陽高平人也。曾祖父龔，祖父暢，皆爲漢三公。父謙，爲大將軍何進長史。進以謙名公之胄，欲與爲婚。見其二子，使擇焉。謙弗許。以疾免，卒于家。獻帝西遷，粲徙長安，左中郎將蔡邕見而奇之。時邕才學顯著，貴重朝廷，常車騎填巷，賓客盈座。聞粲在門，倒屣迎之。粲至，年既幼弱，容狀短小。一座皆驚。邕曰，此王公孫也，有異才，吾不如也。吾家書籍文章，盡當與之。年十七，司徒辟，詔除黃門侍郎，以西京擾亂，皆不就。乃之荊州依劉表。表以粲貌寢而體弱通悅，不甚重也。表卒。粲勸表子琮，令歸太祖。太祖辟爲丞相掾，賜爵關內侯。〔中略〕魏國既建，拜侍中。博物多識，問無不對。時舊儀廢弛，興造制度，粲恆典之。初，粲與人共行，讀道傍碑，人問曰，卿能闇誦乎。曰，能。因使背而誦之，不失一字。觀人圍碁，局壞，粲爲覆之。碁者不信，以把蓋局，使更以他局爲之。用相比較，不誤一道。其彊記默識如此。性善算，作算術，畧盡其理。善屬文，舉筆便成，無所改定，時人常以爲宿構；然正復精意覃思，亦不能加也。著詩、賦、論、議垂六十篇。建安二十一年，從征吳。二十二年春，道病卒。時年四十一。(晉・陳壽撰『三國志』魏書卷二十一，

王衛二劉傳傳第二十一)

【作例】

「王粲」(橋有税『繪本故事談』卷七、正徳四年〔1715〕稱觥堂刊本)

おうし 王思

王思は濟陰(山東省定陶)の人である。曹操は王思を西曹令史、豫州刺史に任用した。正始の頃、大司農になり、九卿の位に至り、列侯に封ぜられた。王思は官吏として有能だったが、心が狭く、性急な人であった。ある日、文章を作ろうとしたが、蠅たちが筆の先に集まり、王思が何回追い払ってもまた戻ってくるので、立ち上がって蠅を捕まえようとしたが、なかなかつかまえることができなかった。すると、王思が戻って筆を地面に投げ捨てて、さらに踏んでつぶした。

【出典】

初，濟陰王思與習俱爲西曹令史。思因直日白事，失太祖指。太祖大怒，教召主者，將加重辟。時思近出，習代往對，已被收執矣。思乃馳還，自陳己罪，罪應受死。太祖嘆習之不言，思之識分，曰，何意吾軍中有二義士乎。後同時擢爲刺史，思領豫州。思亦能吏，然奇碎無大體，官至九卿，封列侯。〔注：魏略〕奇吏傳曰：……思爲人雖繁瑣，而曉練文書，敬賢禮士，傾意形勢，亦以是顯名。正始中，爲大司農，年老目瞑，瞋怒無度，下吏嗷然不知何據。性少信，時有吏父病篤，近在外舍，自白求假。思疑其不實，發怒曰，世有思婦病母者，豈此謂乎。遂不與假。史父明日死，思無恨意。其爲刻薄類如此。思又性急，嘗執筆作書，蠅集筆端，驅去復來，如是再三。思恚怒，自起逐蠅不能得，還取筆擲地，踏壞之。〔晉・陳壽撰『三國志』卷十五，魏書・劉司馬梁張溫賈傳第十五)

【作例】

「王思」(馬場信意『分類書本良材』卷三、正徳五年〔1715〕須原茂

兵衛・柏屋四郎兵衛藏板)

「王思」(文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年 [1803] 吉田新兵衛・鹿島忠兵衛・鶯頭辰三郎刊本)

おうしあん 王子安

↓「王勃」

おうしきょう 王子喬

王子喬は、周靈王の太子晋のことである。笙を吹いて鳳の鳴き声を出すのが好きである。伊洛の間に放浪しているうち、道士浮丘公に出会い、一緒に高山に入った。三十年後、知人の桓良に「七月七日に緜氏山頂で待ち会うよう家族に伝えてほしい」と頼んだ。その日になると、王子喬は果たして白鶴に乗ってやってきた。見えるが、近づけない。手をあげて皆さんにお礼をした。数日経ってから去って行った。後に地元の人々は緜氏と高山で祠を建て王子喬を祀った。崔文子は王子喬に仙術を学んだ。王子喬は白蛻に化けて崔文子に葉を渡そうとしたが、崔文子がびっくりして銚を持って蛻を撃った。よく当ったが、葉が落ちた。よく見ると、王子喬の屍であった。室内に安置して上に大口の籠で覆った。しばらくすると、大鳥に化けた。覆いものを開けてみると、大鳥は飛んでいった。もう一説は、王子喬の墓は都にあり、戦国の頃、誰かに盗掘された。開けてみると、一本の剣が墓の中に懸っていた。取ろうとしたが、剣は竜虎のように大声で吠えた。しばらくすると、真つすぐに空へ飛んで行った。

【出典】

王子喬者、周靈王太子晋也。好吹笙作鳳凰鳴、遊伊洛之間、道士浮丘公接以上嵩高山、三十餘年、後求之於山上、見栢良曰、告我家、

七月七日待我於緜氏山顛。至時、果乘白鶴、駐山頭、望之不得到、

舉手謝時人、數日而去。亦立祠於緜氏山下及嵩高首焉。(漢・劉向撰『列仙傳』卷上)

崔文子者、秦山人也。學仙於王子喬。子喬化爲白蛻、而持葉與文子。文子驚怪。引戈擊蛻、中之、因墮其葉。俯而視之、王子喬之尸也。置之室中、覆以敝筐。須臾、化爲大鳥。開而視之、翻然飛去。(晉・干寶撰『搜神記』卷一)

王子喬墓在京陵。戰國時。有人盜發之。都無見。惟有一劍懸在壙中。欲取而劍作龍虎之聲。遂不敢近。俄而徑飛上天。神仙經云。真人去世。多以劍代。五百年後。劍亦能靈化。此其驗也。出世説(宋・李昉等撰『太平廣記』卷二百二十九)

今城内有故冢方墳、疑卽杜元凱之所謂湯冢者也。而世謂之王子喬冢、冢側有碑題云、仙人王子喬碑。曰、王子喬者、蓋上世之真人、聞其仙、不知興何代也。博問道家、或言潁川、或言產蒙、初建此城、則有斯邱。傳承先民曰、王氏墓、暨於永和之元年冬十二月、當臘之夜、墓上有哭聲、其音甚哀、附居者王伯怪之、明則祭而祭焉、時天鴻雪、下無人徑、有大鳥跡在祭祀處、左右咸以爲神。其後有人著大冠、絳單衣、杖竹立冢前、呼採薪孺子伊永昌曰、我王子喬也、勿得取吾墳上樹也、忽然不見。時令泰山萬熹、稽故老人之言、感精瑞之應、乃造靈廟以休厥神。於是好道之儔、自遠方集、或絃琴以歌太一、或譚思以歷丹田、知至德之宅兆、實眞人之祖先。延熹八年秋八月、皇帝遣使者奉犧牲、致禮祠、濯之。敬肅如也。國相東萊王璋字伯義、以爲神聖所興、必有銘表、乃與長史邊乾遂樹之玄石、紀頌遺烈、觀其碑文、意似非遠、既在遙見、不能不書存耳。(後魏・酈道元注『水經注』卷二十三)

【作例】

「王子喬」(明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷一、萬曆二八年 [1600] 玩虎軒刊本)

〔王子喬〕（明・洪應明撰『仙佛奇踪』卷一、萬曆二〇年〔1602〕太和館刻本）

〔王子喬〕（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十卷、萬曆三十七年〔1609〕刊本）

〔王子喬〕（林守篤編述『畫筌』卷四、正徳二年〔1712〕序、享保六年〔1821〕保壽堂・養心堂刻本）

〔王子喬〕（寂照主人月僊寫並題『列仙圖贊』一、天明四年〔1784〕寂照寺藏板）

〔王子喬〕（蕙齋北尾政美『諸職畫鑑』、寛政六年〔1794〕須原屋板）

〔王子喬〕（渡邊瑛編『邊氏畫譜』、文化三年〔1806〕刊本）

おうじちゅう 王次仲

王次仲は仙人である。伝えることによると、彼は篆書が煩雑のため、隸書を考案したという。秦の始皇帝がそれを聞き、次仲を召したが、次仲がそれを断った。始皇帝が激怒し、「朕が天下を統一したので、皆が服従しなければならぬのだ。次仲が従わなければ、彼の首を持ってこい」と使者に命じた。使者がそれを次仲に伝えると、次仲がただちに大鳥に化し、空に飛んで行った。羽を三本落とし、使者がそれを拾い、始皇帝に報告した。その羽を落とした山は落翻山という。

【出典】

王次仲者、古之神仙也。當周末戰國之時、合縱連衡之際、居大夏小夏山、以爲世之篆文。功多而用寡、難以速就。四海多事、筆札所先。乃變篆籀之體爲隸書。始皇既定天下、以其功利於人、徵之入秦。不至。復命使召之。勅使者曰、吾削平六合、一統天下、孰敢不賓者。次仲一書生而逆天子之命、若不起、當殺之。持其首來、以正風俗。無肆其悻慢也。詔使至山致命、次仲化爲大鳥、振翼而飛。使者驚拜

曰、無以復命、亦恐見殺、惟神人憫之。鳥徘徊空中、故墮三翻。使者得之以進。始皇素好神仙之道、聞其變化、頗有悔恨。今謂之落翻山、在幽州界。鄉里祠之不絕。出仙傳拾遺（宋・李昉等撰『太平廣記』卷五）

王次仲、向結庵隱居泉淥山。善書、因變篆爲隸體、世共宗倣。秦始皇聞而召之、欲爵以官。不至。始皇怒、復遣使欲殺之。次仲變爲大鳥、振翼而起。使者拜告曰、君乃飛去、吾無以復命矣。奈何。須臾墮下三翻、使者乃持還報。因名其處爲落翻山。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷九）

【作例】

〔王次仲〕（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年〔1803〕吉田新兵衛・鹿島忠兵衛・鷲頭辰三郎刊本）

おうしつ 王質

王質は、晋の東陽（浙江省金華。一説は衢州、すなわち今日の浙江省衢州）の人である。山に入って薪を伐採したが、石室山に行くと、石室の中に数人の子供が囲碁を遊んでいる。質は斧を傍に置き、観戦した。子供が棗の種のようなものを王質に与え、その汁を飲むように教えた。すると、王質はお腹がすいたり、咽が乾いたりしない。子供は、「あなたは来て長いので、そろそろ帰って下さい。」と言った。質は斧を取ろうとしたが、柄が既に腐ってしまった。家に帰ると、すでに数百年間が経っている。

もう一説は、王質が見たのは囲碁ではなく、琴であった。

【出典】

王質伐木至石室中、見童子四人彈琴而歌。質因留倚柯聽之。童子以一物如棗核與質、質含之、便不復飢。俄頃、童子曰、其歸。承聲而去。斧柯漙然爛盡。既歸、質去家已數十年。親情凋落、無復向時比

矣。（後魏・酈道元撰『水經注』卷四十）

王質者、東陽人也。入山伐木、遇見石室中有數童子圍碁、歌笑。質聊置斧柯觀之。童子以一物如棗核與質、令含咽其汁。便不覺飢渴。童子云、汝來已久、可還。質取斧、柯爛已盡。質便歸家、計已數百年。（宋・張君房撰『雲笈七籤』卷一百十）

王質、晉 衢州人。入山伐木、至石室山。見石室中有數童子圍碁、質置斧觀之。童子以物如棗核與質、令含咽其汁、便不覺飢渴。童子云、汝來已久、可還。質取斧、柯爛已盡。質亟歸家、已數百年。親舊無復存者。復入山得道。人往往見之。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷四）

【作例】

「王質」（明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷四、萬曆二八年 [1600] 玩虎軒刊本）

「王質」（明・洪應明撰『仙佛奇踪』卷二、萬曆三〇年 [1602] 太和館刊本）

「王質」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十一卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本）

「王質」（橋有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷四、享保四年 [1719] 寶文堂刊本）

「王質」（狩野宗珍筆）（法眼春卜一翁『和漢名畫苑』四卷、寛延二年 [1749] 序、寶文堂刻本）

「王質」（李世南筆）（信天翁月岡法橋雪鼎纂『和漢名筆金玉畫府』初卷、明和八年 [1771] 寶文堂刻本）

「王質」（狩野古法眼筆）（信天翁月岡法橋雪鼎纂『和漢名筆金玉畫府』卷四、明和八年 [1771] 寶文堂刻本）

おうしゅう 王子猷

↓「王徽之」

【作例】

「王子猷」（橋有税『繪本故事談』卷六、正徳四年 [1714] 稱航堂刊本）

「王子猷」（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年 [1803] 田新兵衛・鹿島忠兵衛・鷲頭辰三郎刊本）

おうじゅう 王戎

王戎 (284 ~ 305)、字は濬仲といい、瑯邪臨沂（山東省臨沂）の人である。祖父は幽州刺史で、父親は涼州刺史・貞陵侯であり、代官僚の家庭であった。戎は子供の頃、大変聡明で、風格があった。裴楷がその目を見て言った。「戎の目はきらきらして、稲妻のようだ。」と。六、七歳の頃、宣武場でサーカスを見た際、猛獸が檻の中で吠えると、地面が振動したほどであった。観客は皆逃げけるが、戎は独りで立って動かなかった。表情はいつもと同じく変わらなかった。その時、魏の明帝が階上で観劇したが、戎の様子を見て感心した。また、友達と道端で遊んだところ、スモモの木があり、木に沢山の実がある。友達はいずれも皆先を争って取りに行ったが、戎だけは動かなかった。ある友達がそのわけを尋ねると、戎は「木が道端にあつて実が多いのは、苦いに違いない。」と答えた。友達が取ってきて食べてみると、やっぱり戎の言う通りであった。なぜかという、甘かったら特に誰かにとられたに違いないということである。

阮籍は戎の父親である渾と友人であった。戎はよく阮籍と竹林で遊んでいた。戎はいつも遅れていく。籍は「俗物がまたやってきたな。」とからかい、戎は笑いながら、「あなたたちが言っていることはまた俗だな。」とやりかえす。

戎はけちで、お金が好きであった。彼は沢山の土地を買い取り、あ

ちこちに彼の土地があつた。夥しい粟や金を貯めてもなお不満足。毎日自らそろ盤を持って、昼も夜も計算する。なおいつも足りないと言ふ。よいものを食べ養生することは知らない。天下に笑われ、それがけちという病気で、救いようがないのだと言われた。戎は娘を裴顔に嫁がせたが、数万銭を貸した。しかしなかなか返してくれなかつた。娘が帰省した際、いい顔をしなかつた。娘がすぐ返したら、やつと笑顔ができた。愛息が結婚した際、戎は薄着をあげたが、結婚が終わると、すぐ返すと言つた。家にいいスモモの木がある。時々人に売ると、よそに移植できないようスモモの種を全部抜きとつた。これもまた世の中の笑い話となつた。晋の永興二年(301) 郊県で亡くなつた。七十二歳であつた。諡は元という。

【出典】

王戎字濬冲、瑯邪臨沂人也。祖雄，幽州刺史。父渾，涼州刺史、貞陵亭侯。戎幼而穎悟，神采秀徹。視日不眩，裴楷見而目之曰，戎眼爛爛，如巖下電。年六七歲，於宣武場觀戲，猛獸在檻中虓吼震地，衆皆奔走，戎獨立不動，神色自若。魏明帝於閣上見而奇之。又嘗與羣兒戲於道側，見李樹多實，等輩競趨之，戎獨不往。或問其故，戎曰，樹在道邊而多子，必苦李也。取之信然。阮籍與渾爲友。戎年十五，隨渾在郎舍。戎少籍二十歲，而籍與之交。籍每適渾，俄頃輒去，過視戎，良久然後出。謂渾曰，濬冲清賞，非卿倫也。共卿言，不如共阿戎談。及渾卒於涼州，故吏贈贈數百萬，戎辭而不受，由是顯名。爲人短小，任率不修威儀，善發談端，賞其要會。朝賢嘗上已禊洛，或問王濟曰，昨游有何言談。濟曰，張華善說史漢。裴頠論前言往行，袞袞可聽。王戎談子房、季札之間，超然玄著。其爲識鑒者所賞如此。戎嘗與阮籍飲，時兗州刺史劉昶字公榮在座，籍以酒少，酌不及昶，昶無恨色。戎異之，他日問籍曰，彼何如人也。答曰，勝公榮，不可不與飲；若減公榮，則不敢不共飲；惟公榮可不與飲。戎每與籍爲竹

林之游，戎嘗後至。籍曰，俗物已復來敗人意。戎笑曰，卿輩意亦復易敗耳。「中略」襲父爵，辟相國掾，歷吏部黃門郎、散騎常侍、河東太守、荊州刺史，坐遣吏修園宅，應免官，詔以贖論。遷豫州刺史，加建威將軍，受詔伐吳。戎遣參軍羅尚、劉喬領前鋒，進攻武昌，吳將楊雍、孫述、江夏太守劉朗各率衆詣戎降。戎督大軍臨江，吳牙門將孟泰以蘄春、邾二縣降。吳平，進爵安豐縣侯，增邑六千戶，賜絹六千匹。戎渡江，綏慰新附，宣揚威惠。吳光祿勳石偉方直，不容皓朝，稱疾歸家。戎嘉其清節，表薦之。詔拜偉爲議郎，以二千石終其身。荆土悅服。徵爲侍中。南郡太守劉肇賂戎筒中細布五十端，爲司隸所糾，以知而未納，故得不坐，然議者尤之。帝謂朝臣曰，戎之爲行，豈懷私苟得，正當不欲爲異耳。帝雖以是言釋之，然爲清慎者所鄙，由是損名。「中略」性好興利，廣收八方園田水碓，周徧天下。積實聚錢，不知紀極，每自執牙籌，晝夜算計，恆若不足。而又儉嗇，不自奉養，天下人謂之膏肓之疾。女適裴頠，貧錢數萬，久而未還。女後歸寧，戎色不悅，女遽還直，然後乃權。從子將婚，戎遣其一單衣，婚訖而更責取。家有好李，常出貸之，恐人得種，恆鑽其核。以此獲譏於世。其後從帝北伐，王師敗績於蕩陰，戎復詣鄴，隨帝還洛陽。車駕之西遷也，戎出奔于邾。在危難之間，親接鋒刃，談笑自若，未嘗有懼容。時召親賓，歡娛永日。永興二年，薨于邾縣，時年七十二，諡曰元。(唐・房玄齡等撰「晉書」卷四十三，列傳第十三)

【作例】

「王戎」(橘有税撰『繪本故事談』卷三、正徳四年〔1774〕稱航堂刊本)

おうじゅうかんよう 王戎簡要

王戎は議論するのが簡潔で要点を明確に述べる。そのため友人たちが彼と議論するのは好きであるという。

↓「王戎」

【出典】

〔晉書〕王戎字濬冲，琅邪臨沂人。幼而穎悟，神采秀徹，視日不眩。裴楷見而目之曰，戎眼爛爛如巖下電。〔阮籍素與戎父渾爲友。戎年十五隨父在郎舍，少籍二十歲，籍與之交。籍每適渾去，輒過視戎，良久然後出。謂渾曰，濬冲清賞，非卿倫也。共卿言，不如共阿戎談。歷官至司徒。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

『王戎簡要』（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編卷一、享和元年〔201〕序刊本、河内屋等發行）

おうしゅくし 王宿之

王宿之は蘭亭四十二人（四十三人）の一人である。

【出典】

↓「蘭亭四十二賢圖」、「蘭亭四十三賢圖」

【作例】

『王宿之』（文鳳山人「文鳳駿聲」『文鳳書譜』三編、文化八年〔201〕河内屋・吉田屋刊本）

おうじゅつ 王述（王藍田）

王述（303～368）、字は懷祖という。太原晉陽（山西省太原）子供のところから父親を失い、母親に親孝行でよく知られる。性格は静かである。いつも客と意見が相容れない場合でも、述は平常心を保ち、激昂はしない。若くて父親の爵位を受け継いだ。年が三十になってもあまり知られていないので、人々にアホ「痴」といわれる。司徒王導は門第によって述を中兵属に推薦した。会うと、他の言葉がなく、導は江東の米価をたずねただけで、述は目を張って答えなかった。導は「述

はアホではない。だれがそう言ったか。」と言った。導はいつも発言すると、一座の人々は皆笑う。その時述は嚴肅な表情で言った。「人は堯舜ではないのに、どうしていつも完璧できるか。」と。導は顔色を変え、述に謝った。後に導は庾亮に「述は清くて仁徳がある。彼の祖父に顔が負けないだ。そういう点については、私は彼には及ばないのだ。」と、述を称賛した。康帝の頃、宛陵令に任命され、後に臨海太守、建威將軍、会稽内史を歴任したが、母親が亡くなったため、官を辞めた。後に楊州刺史、征虜將軍を務めた。述は性急な人である。かつて卵を食べる時、箸で刺そうとしたが、うまくいかず、苛立って地面に投げた。しかし卵はぐるぐる回って止まらなかった。立腹してベッドから降りて下駄の齒で踏み潰そうとした。が、これもまたうまくいかない。激怒して卵を拾い上げて口に入れてしまった。齧り潰してから吐き出した。ところが、重臣になってから彼は変わった。いつも辛抱強く落ち着いて職を務めた。三年、述は病に倒れ、亡くなった。六十六歳であった。

【出典】

〔述字懷祖。少孤，事母以孝聞。安貧守約，不求聞達。性沈靜，每坐客馳辨，異端競起，而述處之恬如也。少襲父爵。年三十，尚未知名，人或謂之癡。司徒王導以門地辟爲中兵屬。既見，無他言，惟問以江東米價。述但張目不答。導曰，王掾不癡，人何言癡也。嘗見導每發言，一座莫不贊美，述正色曰，人非堯舜，何得每事盡善。導改容謝之。謂庾亮曰，懷祖清貞簡貴，不減祖父，但曠淡微不及耳。康帝爲驃騎將軍，召補功曹，出爲宛陵令。太尉、司空頻辟，又除尚書吏部郎，並不行。〔中略〕述出補臨海太守、遷建威將軍、會稽内史。莅清肅，終日無事。母憂去職。服闋，代殷浩爲揚州刺史，加征虜將軍。〔中略〕嘗食雞子，以筯刺之，不得，便大怒擲地。雞子圓轉不止，便下牀以屐齒踏之，又不得，瞋甚，掇納口中，嚙破而吐之。既躋重

位、毎以柔克爲用。「中略」述竟不起。三年卒、時年六十六。(唐・房玄齡等撰『晋書』卷七十五、列傳第四十五)

【作例】

「王述」(橋有税撰『繪本故事談』卷六、正徳四年 [1714] 稱航堂刊本)

おうしゅんけんとう 王濬懸刀

王濬 (306 ~ 285) は、字は士至といい、弘農の湖(河南省靈宝)の人である。彼が広漢太守になった時、三本の刀が寢室の天井の梁に懸かっている夢を見た。しばらくするともう一本の刀が増えた。彼が大変驚いて目が覚めた。彼があまりいい兆候ではないと思ひ、気にしていた。しかし、主簿の李毅が彼に祝いに「三本の刀が梁に懸かるのは州という文字の意味です。更に一本が増えることは益すという意味です。ひよっとしたら、益州に榮転するではないでしょうか」と夢を解いた。後に彼が果たして益州の刺史に榮転したのであるという。

(唐・房玄齡等撰『晋書』卷四十二、列傳第十二)

【出典】

『晋書』王濬字士治、弘農湖人。博涉墳典、疏通亮達。恢廓有大志。嘗起宅、開門前路。廣數十步、欲使容長戟幡旗。衆咸笑之。辟河東從事。守令有不廉潔者。皆望風引去。除巴郡太守。郡邊吳境、兵士苦役、生男多不養。濬乃嚴其科條、寬其徭課。其產育者、皆與休復。所全活數千人。轉廣漢太守。垂惠布政、百姓賴之。夜夢懸三刀於臥屋梁上、須臾又益一刀。濬意甚惡之。主簿李毅拜賀曰、三刀爲州字、又益一刀者、明府其臨益州乎。果遷益州刺史。後再刺史益州。武帝謀伐吳、詔濬修舟艦。乃作大船連舫、以木爲城、起樓櫓、畫鷁首怪獸於船首、以懼江神。舟楫之盛、自古未有。拜龍襄將軍、監軍統兵、先在巴郡之所全育者、皆堪徭役供軍。其父母戒之曰、王府君生爾。

爾必勉之。無愛死也。濬自發蜀、兵不血刃。順流鼓棹、徑造三山。孫皓降、濬解縛受璧焚檣、送於京師。以功封襄陽縣侯。累轉撫軍大將軍。卒諡武。(唐・李瀚撰『蒙求』)

【作例】

「王濬懸刀」(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷二、享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行)

おうしゅんたんぼ 王珣短簿

王珣 (350 ~ 401) は、字は元琳といい、宰相王導の孫である。彼が二十歳の頃、謝玄と共に大將軍桓温の属官となった。桓温が二人の才能を高く評価し、将来きつと高位に就くだろうと言った。珣がかつて椽のような筆をもらった夢を見た。しばらくしてから帝が崩御し、珣が帝のために哀悼の文と贈り名の文を作った。隆安四年(401)珣が病死し、五十二歳であった。車騎將軍、開府の官職を贈られ、諡は獻穆という。(唐・房玄齡等撰『晋書』卷六十五、列傳第三十五)

【出典】

『晋書』王珣字元琳、丞相導之孫。弱冠與謝玄爲温掾。温嘗謂之曰、謝掾年四十必擁旄杖節。王掾嘗作黑頭公。皆未易才也。孝武時爲僕射領吏部。帝雅好典籍、以才學文章見昵。夢人以大筆如椽與之、既覺語人曰、此當有大手筆事。俄而帝崩、哀冊諡議皆珣所草。(唐・李瀚撰『蒙求』)

【作例】

「王珣短簿」(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編卷二、享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行)

おうしゅうてつしや 王脩輟社

王脩は、字は叔治といい、北海の營陵(山東省昌樂)の人である。

彼が七歳の頃母親を亡くした。翌年近所の皆が祭りを準備するが、彼が母親のことを思い大変悲しかった。そのため、皆が王脩のために祭りを取りやめた。（晋・陳壽撰『三国志』魏志卷十一）

【出典】

魏志，王脩字叔治，北海營陵人。年七歲喪母。以社日亡。來歲鄰里社，脩感念母哀甚。鄰里爲之罷社。後太祖破南皮，閱脩家，穀不滿十斛，有書數百卷。太祖歎曰，士不妄有名。乃辟爲司空掾，遷魏郡太守。爲治抑強扶弱。百姓稱之。（唐・李瀚撰『蒙求』）

【作例】

「王脩輟社」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷二、享和元年〔801〕序刊本、河内屋等發行）

おうじゅん 王純

王純は王恂の誤りである。

↓「王恂」

【作例】

「王純」（橘有税撰『繪本故事談』卷四、正徳四年〔1714〕稱航堂刊本）

おうしよ 王處

王處は王處一の誤りである。

↓「王處一」

【作例】

「王處」（蕙斎北尾政美『諸職畫鑑』、寛政六年〔1794〕須原屋板刊本）

おうしよいち 王處一

王處一、号は玉陽といい、寧海東牟（遼寧省金州）の人である。母

親周氏が妊娠した際、赤い霞が身の周りにでき、驚いて目が覚めると處一を生んだ。子供の頃、山中で一人の老人に出会った。老人は石の上に座り、彼に言った。「君は将来都に名を知れ渡るんだ。その時道教の宗主となるのだ。」と。後梁の大定八年（562）、處一は重陽祖師に出会い、全真庵で弟子の礼を行った。後に重陽について煙霞に至り、秘法を授かった。處一の母親も重陽に師事し、一緒に道を学ぶ。彼女は「玄靜散人」を号とした。あるとき、處一は独りで鉄查山におり、重陽と丹陽は龍泉に行く途中、ちょうど昼で暑くて、重陽は傘を持って空を飛んで行った。その傘が處一の庵の前に落ちた。傘に祖師の筆跡が書いているので、よくわかった。龍泉は查山まで二百里ぐらいい距離がある。處一は雲光洞に隠居しており、崖ブチに片足で数日立っても動かなかった。そのために「鉄脚仙人」と呼ばれていた。

【出典】

王處一、寧海東牟人、號王陽。母周氏孕時、夜夢紅霞繞身、驚寤而生。兒時遊戲山中、遇一老人坐大石上、謂之曰、子異日揚名帝闕。爲道教宗主。大定八年、遇重陽祖師於全真菴、請爲弟子。後從重陽至煙霞。授以正法。其母亦拜重陽。願俱學道。號玄靜散人。處一獨在鐵查山。重陽與丹陽輩行龍泉道中。時日方熾。重陽執傘忽騰空而去。自辰至晡。其傘墮於處一之菴前。傘上有祖師手字。龍泉踏查山。幾二百里。處一隱於雲光洞。常臨危崖。翹足駐立。不移者數日。人以鐵脚仙人目之。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷八）

【作例】

「王處一」（明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷八、萬曆二八年〔1600〕玩虎軒刊本）

「王處一」（林守篤編述『畫筌』卷四、正徳二年〔1712〕序、享保六年〔1721〕保壽堂・養心堂刻本）

おうししょう 王祥

王祥(185-259)、字は休徴といい、瑯邪臨沂(山東省臨沂)の人である。漢代諫議大夫吉之の末裔である。祖父は青州刺史であった。祥は生まれつきの親孝行である。母親は早く亡くなり、義理の母親は慈愛の心がなく、さんざん父親の前で祥の悪口を言う。そのため祥は父親からも見放された。いつも牛小屋を掃除するよう命じられた。両親が病気になる、服も脱がずに世話をした。湯薬は必ず自ら味見をしてから親に出す。継母はかつて新鮮な魚がほしかった。ちょうど真冬で、川が凍った。祥は服を脱ぎ、氷を溶かそうとした。そこで、氷が突然自ら溶けて二匹の魚が躍り出た。祥はそれを持ち帰った。継母がまた黄雀の炙り料理を食べたいといい、今度は十数羽の黄雀が自ら祥の網に入った。祥はそれを持って炙り料理を作り継母に出した。近所の人々は皆驚いて、きつと祥の親孝行が神様を感動させただろうという。また赤いリングが実り、継母が昼も夜も見守るよう祥に命じた。風や雨の度に、祥が木を抱きながら泣く。まさに親孝行の手本である。漢の末、世の中が乱れ、祥は継母と弟を連れ、廬江に避難した。隠居して三十年あまり、州や郡の任命に応じなかった。継母が亡くなった後、喪服して体を壊したぐらいであった。喪服の期間が終わった後、やつと杖で立てた。

【出典】

王祥、字休徴、瑯邪臨沂人。漢諫議大夫吉之後也。祖仁、青州刺史。父融公、府辟不就。祥性至孝、早喪親。繼母朱氏不慈、數讒之。由是失愛於父。每使掃除牛下、祥愈恭謹。父母有疾、衣不解帶、湯藥必親嘗。母常欲生魚、時大寒冰凍、祥解衣將剖冰求之。冰忽自解、雙鯉躍出、持之而歸。母又思黃雀炙、復有黃雀數十飛入其幃、復以供母。鄉里驚嘆、以爲孝感所致焉。有丹漆結實、母命守之。每風雨、

王祥輒抱而泣。其篤孝純至如此。漢末遭亂、扶母攜弟避地廬江、隱居三十餘年、不應州郡之命。母終、居喪毀瘠、杖而後起。(唐・房玄齡等撰『晉書』卷三十三)

【作例】

- 「剖水鯉出」(元・虞韶編『新刊大字分類校正日記故事大全』卷一、嘉靖二十一年[1542]序刊本)
 「臥水求鯉」(『點石齋叢書』、光緒二十一年[1895]序、上海點石齋書局石印本)
 「臥水求鯉」(『新鍔解官様日記故事大全』卷一、寛文九年[1669]覆明刊本)
 「剖水躍鯉」(『圖像合璧君臣故事句解』卷二、寛文二十二年[1672]跋、延寶二年[1674]上田甚兵衛板行、和刻本)
 「剖水出鯉」(『新鍔類官様日記故事大全』卷三、寛文九年[1669]覆明刊本)
 「王祥」(文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年[1803]吉田新兵衛・鹿島忠兵衛・鷲頭辰三郎刊本)
 「王祥」(南里亭其樂輯、葛飾戴斗畫『二十四孝圖會』、文政五年[1822]河内屋等發兌)
 「王祥」(悟足齋固碩書『二十四孝繪抄』天保十三年[1842]、須原屋等發行)

おうししょうぎょとう 王承魚盜

王承は、字は安期といい、汝南内史である王湛の子である。彼が東海太守であった際、社会の治安が良かった。ある下級官吏が池の中の魚を盗み取ったが、役人が懲罰しようとしているところ、王承が「周の文王の動物を飼育する園も庶民と共に楽しむので、池の魚ぐらいは惜しまない」と言い、その寛大さを示したのである。(唐・房玄齡

等撰『晋書』卷七十五、列傳第四十五)

【出典】

〔晉書〕王承字安期，汝南內史湛之子。爲東海太守。政尚清淨，不爲細察。小吏有盜池中魚者。綱紀推之。承曰，文王之囿與衆共之。池魚何足惜邪。有犯夜者，爲吏所拘。承問其故。答曰，從師受書，不覺日暮。承曰，鞭撻甯越，以立威名，非政化之本。使吏送令歸家。其從容寬恕如此。渡江爲元帝鎮東府從事中郎，甚見優禮。承少有重譽，而推誠接物，衆咸親愛。名臣王導〔衛玠〕周顛〔庾亮〕之徒，皆出其下。爲中興第一。(唐・李瀚撰『蒙求』)

【作例】

『王承魚盜』(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷四、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行)

おうしょうくん 王昭君

王昭君、名は嬙、嬙、字は昭君、一説字は嬙という。南郡秭歸(湖北省)の人である。漢の元帝の宮女であったが、なかなか帝に会えない。帝が宮女を呼び出す際、いつも似顔絵を見て決めるので、皆宮廷の絵師に賄賂を渡して、自分を実際より美しく描くよう頼むが、王昭君だけは自分の容姿に自信があり、やらなかった。そのため、絵師毛延寿が彼女を醜く描いたという。後に匈奴の王が来て、妻をもらいたいと申し出た。そこで王昭君はそれに応募した。選定の日に王昭君が現れた。彼女はまさに仙女のようで美しかった。帝が驚いて、止めようとしたが、もう遅かった。後に毛延寿らが皆処刑されたという。

竟寧三年(前33)、王昭君は匈奴呼韓邪単于の妻になり、男の子を一人産んだ。すなわち伊屠知牙師である。呼韓邪単于が崩御した後、呼韓邪単于とはかの妻と産んだ子供が王位を継承した。匈奴の風習によると、新しい単于は前の単于の妻たちを娶る権利がある。そのため、

王昭君が漢の朝廷に帰りたいと懇願したが、朝廷は胡の風習に従いなさいと許さなかった。仕方なく、王昭君が王位を継承した次の単于の妻になり、二人の女の子を産んだ。すなわち長女須卜居次と次女當于居次である。結局、王昭君が匈奴の地で亡くなった。

【出典】

竟寧元年春正月、匈奴呼韓邪単于來朝。詔曰、匈奴郅支單于背叛禮義、既伏其辜、呼韓邪単于不忘恩德、鄉慕禮義、修復朝賀之禮、願保塞傳之無窮、邊垂長無兵革之事。其改元爲竟寧、賜單于待詔掖庭王嬙爲闕氏。應劭曰、郡國獻女、未御見、須命於掖庭、故曰待詔。王嬙王氏女、名嬙、字昭君。文穎曰、本南郡秭歸人也。(漢・班超撰『漢書』卷九、元帝紀第九)

元帝後宮既多、不得常見、乃使畫工圖形、案圖召幸之。諸宮人皆賂畫工、多者十萬、少者亦不減五萬。獨王嬙不肯、遂不得見。後匈奴入朝、求美人爲闕氏。於是上案圖、以昭君行。及去、召見、貌爲後宮第一、善應對、舉止閑雅。帝悔之、而名籍已定。帝重信於外國、故不復更人。乃窮案其事。畫工皆棄市。籍其家貲、皆巨萬。畫工有杜陵毛延壽、爲人形醜好老少必得其真。安陵陳敞、新豐劉白、隄寬並工爲牛馬、飛鳥。衆勢人形、好醜不逮延壽。下杜陽望亦善畫、尤善布色。樊育亦善布色。同日棄市。京師畫工於是差稀。(晉・葛洪撰『西京雜記』卷二)

【作例】

『王昭君』(清・顏鑑塘題詩、王翹繪圖『百美新詠』圖傳二十六、嘉慶〔1796〕-1820〕年間顏氏刻本)

『王昭君』(『吳友如畫寶』第二集上・古今百美圖、中国古畫譜集成第二十一卷、山東美術出版社、2000年)

『王昭君』(橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷四、貞享五年〔元祿一、1688〕刊本)

〔王昭君〕(某岡之繪『繪圖の林』巻上、元禄二年〔1689〕刊本)

〔王昭君〕(馬場信意『分類畫本良材』巻四、正徳五年〔1715〕須原茂兵衛・柏屋四郎兵衛蔵板)

〔王昭君〕(安信筆)(林守篤編述『畫筌』巻四、正徳二年〔1712〕序、享保六年〔1721〕保壽堂・養心堂刻本)

〔王昭君〕(文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年〔1803〕吉田新兵衛・鹿島忠兵衛・鷲頭辰三郎刊本)

〔王昭君圖〕(古筆了意撰『探幽臨畫』巻上、皓月堂梓)

〔王昭君圖〕(桂處南原薫摹『聚美畫鑒』巻、明治二年〔1869〕芝川又右衛門發行)

〔王昭君圖〕(桂處南原薫摹『聚美畫鑒』弐、明治二年〔1869〕芝川又右衛門發行)

おうしようくん 王照君

↓〔王昭君〕

おうしようしが 王商止訛

前漢の王商(ㄉゝ前ㄉゝ)は、字は子威といい、涿郡の蠡吾(河北省博野)の人である。父親は宣帝(前74〜前49在位)の母親方の叔父にあたり、樂昌侯である。商は元帝(前66〜前33在位)の頃右將軍、光祿大夫であり、成帝(前33〜前)の頃左將軍である。建始三年(前33)の秋、都で洪水が流れて来たという噂が流れ、市民がパニックになり皆避難し始めた。長安城内は大混乱になった。成帝は大臣たちを集め脱出の方策を検討させた。大將軍王鳳が船での脱出を提案し、皆がそれに賛成した。商だけは洪水の話はデマに過ぎないので、脱出の必要がないと主張した。後に確認してみると、果たしてデマであったという。(漢・班固撰『漢書』巻八十二、列傳第)

【出典】

前漢 王商字子威、涿郡蠡吾人。成帝時爲左將軍。京師民無故相驚、言大水至。百姓奔走相蹂躪、老弱號呼、長安中大亂。天子召公卿議。大將軍王鳳以爲太后與上及後宮可御船。令吏民上長安城以避水。商曰、自古無道之國、水猶不冒城郭、今政治和平、世無兵革、上下相安、何因有大水暴至、此必訛言。上迺止。果訛言。上美壯商之固守、數稱其議。而鳳之大慙。後爲丞相、爲人多質而有威重。長八尺餘、身體鴻大、容貌過人。單于來朝、商坐未央廷中、單于前拜謁商、仰視大畏之、遷延卻退。上聞歎曰、眞漢相矣。鳳怨商、陰求其短。卒爲所中、免相薨。(唐・李瀚撰『蒙求』)

【作例】

〔王商止訛〕(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編巻二、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行)

おうしよへい 王初平

王初平は皇初平(または黄初平)の誤りである。

↓〔皇初平〕、〔黄初平〕

【作例】

〔王初平〕(滝澤清畫『潜龍堂畫譜』人物之部、明治一五〔1882〕松崎半造出版)

おうしようれい 王昌齡

王昌齡は字が少伯という。生まれは京兆(唐代では長安である。陝西省西安)である。また江寧(江蘇省南京)、太原(山西省太原)などの説がある。彼は進士に及第した後、校書郎、汜水県尉、龍標尉を歴任する。後に刺史閻丘暉によって殺された。詩集五巻がある。

【出典】

開元、天寶間、文士知名者、汴州 崔顥、京兆 王昌齡、高適、襄陽 孟浩然、（中略）王昌齡者、進士登第、補祕書省校書郎。又以博學宏詞登科、再遷汜水縣尉。不護細行、屢見貶斥、卒。昌齡爲文、緒微而思清。有集五卷。（後晉・劉昫等撰『舊唐書』卷一百九十下、列傳第一百四十下）

昌齡字少伯、江寧人。第進士、補祕書郎。又中宏辭、遷汜水尉。不護細行、貶龍標尉。以亂還鄉里、爲刺史間丘曉所殺。（宋・歐陽修、宋祁撰『新唐書』卷二百三、列傳第一百二十八）

王昌齡、字少伯、太原人。開元十五年、李嶷榜進士、授汜水尉。又中宏辭、遷校書郎。（中略）昌齡工詩、縝密而思清。時稱詩家夫子王江寧、蓋嘗爲江寧縣令。與文士王之渙、辛漸交友至深、皆出模範、其名重如此。有詩集五卷。（元・辛文房撰『唐才子傳』卷二）

【作例】

「王昌齡」（狩野探幽繪『詩仙堂志』詩仙圖録、萬治二年〔659〕序刊本）

おうしんけい 王晋卿

宋の王晋卿は蘇軾等と共に駙馬都尉王鈇の招待を受け、西園での宴会に出席した。その席で李公麟（龍眠、伯時）が揮毫し「西園雅集圖」を描いた。

↓「西園雅集圖」

【出典】

王晋卿、河朔人。少勇敢、爲鄉里所推。周世宗在澶淵、晋卿以武藝求見、得隸帳下。及即位、補東頭供奉官。從戰高平、征淮甸、每遣宣旨密旨、甚親信之。洎北征、爲先鋒都監、督戰有功、詔權控鶴都虞候。克蘭南、授軍器庫使。顯德四年、爲龍捷右第一軍都指揮使、領彭州刺史。恭帝即位、出爲濱州刺史。乾德中、爲興州刺史。四年、

移漢州。時蜀初平、寇盜充斥、晋卿嚴武備、設方略、禽捕翦滅、靡有遺漏、自是雖劇賊無敢窺其境。然以賄聞、太祖惜其才而不問。秩滿歸闕、以疾求頤養、改左監門衛將軍、奉朝請。貢重錦十四、銀、兩以謝、詔不納、以其贖貨愧之也。未幾、詔戍北邊、疆場清肅。開寶四年、復授莫州刺史。在郡謹斥候、善撫循、士卒皆樂爲之用、邊民安堵。六年八月、卒、年六十七歲。（元・脫脫等撰『宋史』卷二百七十一、列傳第三十）

【作例】

「王晋卿」（西園雅集）（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年〔1803〕吉田新兵衛・鹿島忠兵衛・鷲頭辰三郎刊本）

おうそんいっばん 王孫一飯

「王孫一飯」はまた「漂母一飯」、「漂母飯信」などという。韓信は城下で釣りをしている、年配の女たちが川辺で洗濯した。中の一人が信を不憫に思い、数十日も信に飯を与え続けた。信は大変喜んで漂母に言った。「私は必ず恩返しをする。」と。漂母は怒った。「男として自立さえできない。私は君を哀れに思っているから飯を与えた。恩返しとか根っから考えていない。」と、韓信を叱った。

【出典】

信釣於城下、諸母漂、有一母見信饑、飯信、竟漂數十日。信喜、謂漂母曰、吾必有以重報母。母怒曰、大丈夫不能自食、吾哀王孫而進食、豈望報乎。（漢・司馬遷撰『史記』卷九十二、淮陰侯列傳第三十二）

【作例】

「王孫一飯」（明・陳洪綬繪『博古葉子』、順治八年〔651〕黃建中刻本）

「漂母飯信」（『點石齋叢書』、光緒二年〔1886〕序、上海點石齋書

局石印本)

「韓信」「王孫一飯」(前北齋畫改狂老人筆『繪本魁』『畫本魁』、天保七年〔1836〕秋田屋等發行)

おうだいじょう 王大娘

唐の玄宗帝が勤政楼に行き、盛大に音楽会を行った。教坊の王大娘は竿を持つのが得意である。それはすなわち百尺の竿の上に木山を設け、その形は瀛州の方丈のようである。二十八人の子供に絳節を持たせ、中を出入りするように命じる。それと同時に、王大娘の踊りも止まらない。

【出典】

王大娘者、善戴百尺竿。竿上施木山、狀瀛洲、方丈、令小兒持絳節出入于其間、歌舞不輟。(唐・鄭處誨撰『明皇雜錄』卷上)

建中中、戴竿三原婦人王大娘、首戴二十八人而走。(宋・錢易撰『南部新書』癸)

【作例】

「王大娘」(大岡春卜『和漢故事卜翁新畫』卷四、寛延四年〔寶曆一、

1761〕序、寶曆三年〔1753〕敦賀屋九兵衛・泉屋喜太郎・西村源六刊行)

おうたいふ 汪台符

汪台符は徽州(一説は歙州。今日安徽省歙県)の人である。生まれつき聡明で、凶吉を予知することができる。文章が得意で、古今のことをよく知っている。汪台符は酒が好きである。徐知誥が金陵の行政長官だった頃、汪台符が徐に民間の苦しみを陳情したことがある。徐が汪台符を大事にしていた。しかし、宋齊邱は汪台符の才能に嫉妬している。彼は部下たちを遣って汪台符と一緒に酒を飲ませた。汪台符

は彼の殺意を予知したので、わざと大酒を飲み、横になった。部下たちが汪台符を川に沈めた。後に人々がよく黄山で汪台符を見かけた。宋齊邱がそれを聞き、死体を探してみると、衣冠しか残っていなかったという。

【出典】

汪台符、歙州人也。能文章、通古今、有王佐之才。聞烈祖移鎮金陵、台符上書、陳民間利害十餘條、大率以富國阜民爲務。烈祖善之、而宋齊邱疾其才高、屢爲詆訾。台符由是不平。齊邱始字超回、台符貽書謂之、曰、聞足下齊大聖以爲名超亞聖、以稱字齊邱。夫慚改字子嵩。因使親信誘台符乘舟痛飲、推沉石城蚶蜆磯下。(宋・馬令撰『馬氏南唐書』卷十四)

汪台符、徽州人。生而靈異。逆知吉凶。能文章。博今古。性獨嗜酒。徐知誥鎮金陵。台符詣陳民間利病。知誥甚尊重之。宋齊丘疾其高明。使親信誘台符飲。符卽知。故浮白痛飲。臥地。因推沉石頭蚶蜆磯下。後人每於黄山白嶽見之。齊丘聞。覓其尸。惟衣冠存耳。(明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷七)

【作例】

「汪台符」(明・王世貞『有象列仙全傳』卷七、萬曆二八年〔1600〕玩虎軒刊本)

「汪台符」(馬場信意『分類畫本良材』卷五、正徳五年〔1715〕須原茂兵衛・柏屋四郎兵衛蔵板)

おうたいふ 王台符

王台符は汪台符の誤りである。

↓「汪台符」

【作例】

「王台符」(文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年〔1803〕吉田新兵衛・

鹿島忠兵衛・鷺頭辰三郎刊本)

おうちゆうし 王仲至

↓「西園雅集圖」

【作例】

「王仲至」〔西園雅集圖〕（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年〔1803〕
吉田新兵衛・鹿島忠兵衛・鷺頭辰三郎刊本）

おうてい 王鼎

王鼎は襄陽の人である。初めは医者や卜者の業をして妻子を養ったが、後に鍾離權に出会い道を得た。自ら「王同子」を号とする。彼が飲食しているところを誰も見たことがない。ある日、川辺を行き、水中に二つの面影がある。人が不思議で彼に聞いたが、彼は「私はもつと見たかった。それは十数のがあるはずだ。」と答えた。しばらくしてなくなった。宋の真宗帝の大中祥符年間（1008～1016）、宮中に招かれた。王鼎は麻衣と草履の姿で、膝も跪かないで長揖の礼をするだけであった。後に行方不明になった。著した『修真書』が世に伝わっている。

【出典】

王鼎，襄陽人也。其初。蓋寄跡醫卜中以養妻子。嘗有詩云，也有山妻也有兒，也爲卜筮也爲醫。後遇鍾離先生得道。作詩云，假裏淘眞十八年，今朝始遇漢朝賢。遂自號王同子。人不見其飲食也。一日行江干，或見二影在水中。怪而問其故。曰，若欲更見之乎。斯須十餘。久乃沒。宋眞宗祥符中召至禁中。麻衣草履，長揖而已。後去，不知所之。著修真書行於世。（宋・趙全陽撰『歷代眞仙體道通鑑』下卷五十）

【作例】

↓「王風子」

おうとう 王泰

【作例】

「王泰」（大岡春卜『和漢故事卜翁新書』卷五、寛延四年〔寶曆一、1751〕序、寶曆三年〔1753〕敦賀屋九兵衛・泉屋喜太郎・西村源六刊行）

おうとうこうちゆう 王導公忠

晋の王導（276～339）は、字は茂弘といい、臨沂（山東省臨沂）の人である。元帝（317～322在位）がまだ瑯邪王であった時代、導がすでに帝に仕えていた。帝が導のことを漢の名宰相蕭何にたとえて「私の蕭何」と称賛した。後に帝が即位した際、導と一緒に玉座に座るよう命じたが、導がそれを固辞した。帝が感心し、導を驃騎大將軍に任命した。従兄の王敦が反乱を起こした際、近臣の劉隗が王氏一族を処刑しよう帝に建言した。導自身も罪の深さがわかり、王氏一族を二十数人連れ、連日宮殿の外で処分を待っていた。帝が導の忠心に感動し、一族を赦免した。導が謝罪に入った際、帝が慌てて裸足で迎えた。元帝が崩御した後、導が重臣として引き続き明帝（322～329在位）、成帝（329～335在位）を補佐したのである。咸康五年、導が六十四歳（数え年）で病死した。成帝が大鴻臚（国家の儀礼を掌る長官）を派遣し、最高の礼遇で盛大に葬儀を営んだのである。（唐・房玄齡等撰『晋書』巻六十五、列傳第三十五）

【出典】

晋王導字茂弘，光祿大夫覽之孫。少有風鑒，識量清遠。陳留高士張公見而奇之，謂其從兄敦曰，此兒容貌稚氣將相之器也。元帝爲琅邪王，與導素相親善，導知天下已亂，遂傾心推奉，潛有興復之志。

帝亦雅相器重。會帝出鎮下邳，請導爲安東司馬。軍謀密策，知無不爲。帝嘗謂曰，卿吾之蕭何也。累遷中書監、錄尚書事，及帝登尊號，百官陪列，命導升御床共坐。導固辭曰，若太陽下同萬物，蒼生何由養照。帝乃止。進位司空。（唐・李翰撰『蒙求』）

【作例】

『王導公忠』（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編卷一、享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行）

おうとん 王恠

『絵本故事談』には「王純」となっているが、正しいのは「王恠」である。王恠、字は少林といい、廣漢新都（四川省）の人である。若い頃、王恠が節義があるのは評判となっていた。はじめは郡の功曹などを務めたが、後に郡令になり、冤罪を晴らし、地方の有力者を抑えることにより、民衆に賞賛された。

【出典】

王恠字少林，廣漢新都人也。恠嘗詣京師，於空舍中見一書生疾困，愍而視之。書生謂恠曰，我嘗到洛陽，而被病，命在須臾，腰下有金十斤，願以相贈，死後乞藏骸骨。未及問姓名而絕。恠即鬻金一斤，營其殯葬，餘金悉置棺下，人無知者。後歸數年，縣署恠大度亭長。初到之日，有馬馳入亭中而止。其日，大風飄一繡被，復憶恠前，即言之於縣，縣以歸恠。恠後乘馬到雒縣，馬遂奔走，牽恠入他舍。主人見之喜曰，今禽盜矣。問恠所由得馬，恠具說其狀，并及繡被。主人悵然良久，乃曰，被隨旋風與馬俱亡，卿何陰德而致此二物。恠自念有葬書生事，因說之，并道書生形貌及埋金處。主人大驚號曰，是我子也。姓金名彥。前往京師，不知所在，何意卿乃葬之。大恩久不報，天以此章卿德耳。恠悉以被馬還之，彥父不取，又厚遺恠，恠辭讓而去。時彥父爲州從事，因告新都令，假恠休，自與俱迎彥喪，餘

金俱存。恠由是顯名。仕郡功曹，州治中從事。舉茂才，除郿令。到官，至釐亭，亭長曰，亭有鬼，數殺過客，不可宿也。恠曰，仁勝凶邪，德除不祥，何鬼之避。即入亭止宿。夜中聞有女子稱冤之聲。恠呪曰，有何枉狀，可前求理乎。女子曰，無衣，不敢進。恠便投衣與之。女子乃前訴曰，妾夫爲涪令，之官過宿此亭，亭長無狀，賊殺妾家十餘口，埋在樓下，悉取財貨。恠問亭長姓名。女子曰，即今門下遊徼者也。恠曰，汝何故數殺過客。對曰，妾不得白日自訴，每夜陳冤，客輒眠不見應，不勝感恚，故殺之。恠曰，當爲汝理此冤，勿復殺良善也。因解衣於地，忽然不見。明日召游徼詰問，具服罪，即收繫，及同謀十餘人悉伏辜，遣吏送其喪歸鄉里，於是亭遂清安。（南朝宋・范曄撰『後漢書』卷八十一，列傳第七十一）

【作例】

『警葬書生』（元・虞韶編『新刊大字分類校正日記故事大全』卷八、嘉靖二年 [1523] 序刊本）

↓「王純」、「王恠繡被」

おうとんけいしつ 王敦傾室

王敦（266～324）は、字は處仲といい、臨沂（山東省臨沂）の人である。晋武帝の娘である襄城公主を娶り、駙馬都尉を拜命した。彼は荒淫無度であるため、体を壊した。側近の諫めを聞き入れて、王敦が家の裏口を開けて妾や侍女を数十人追い出したという。（唐・房玄齡等撰『晋書』卷九十八、列傳第六十八）

【出典】

『晋書』王敦字處中。少有奇人之目。尚武帝女襄城公主，拜駙馬都尉。明帝初，移鎮姑熟，自領揚州牧。謀逆病死。割棺戮屍。初石崇以奢豪矜物。廁上常有十餘婢侍列。皆有容色。置甲煎粉、沈香汁，有如廁者，皆易新衣而出。客多羞脫衣。而敦脫故著新，意色無作。群婢

曰、此客必能作賊。又嘗荒恣於色。體爲之弊。左右諫之。敦曰、此甚易耳。乃開後閣、驅諸婢妾數十人、並放之。時人嘆異。（唐・李瀚撰「蒙求」）

【作例】

「王敦傾室」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷七、享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行）

おうとんしゅうひ 王恠繡被

↓「王恠」

【出典】

後漢王恠字少林、廣漢新都人。嘗詣京師、於空舍中、見一書生金彦疾困、愍而視之。生曰、我命在須臾。腰下有金十斤。願以相贈。死後乞藏骸骨。已而金命絕。恠鬻一斤營葬、餘悉置棺下。人無知者。恠後署大度亭長。初到有馬馳入亭中而止。其日大風、飄一繡被、復墮恠前。即言之於縣。縣以歸恠。後乘馬到雒縣。主人見之、問所由得馬。恠具說其狀、并及繡被。主人曰、卿何陰德而致此。恠因說葬書生事。主人驚曰、是我子也。大恩久不報。天以此彰卿德耳。由是顯名。仕郡爲功曹。（唐・李瀚撰「蒙求」）

【作例】

「王恠繡被」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編卷六、享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行）

おうばくいんげん 黄檗隱元

【作例】

「黄檗隱元」（法眼春下一翁『和漢名畫苑』雜諸流六、寛延二年 [1749] 序刊本）

おうばくこせい 黄檗虎聲

「黄檗虎聲」は禪宗の公案の一つである。その会話はすべて禪語である。師は聞いた。「黄檗はどこから来た。」と。黄檗は「山の麓で茸を採ってきた。」と答えた。師は「山の麓に一匹の虎がいる。あなたは見かけたか。」と聞いた。すると、黄檗は虎の声を真似た。師は腰から斧を取って切るふりをした。黄檗は師の手を掴んで平手を打った。その晩、高座に上って皆に言った。「山の麓に虎がいる。あなたたちが出入りの際、十分気をつけて下さい。私は今朝噛まれた。」と。

【出典】

上堂、衆纒集。師以拄杖趁下。卻召大衆。大衆回頭。師云、是什麼。瀉山問仰山、百丈再參、馬祖豎拂因緣、此二尊宿意旨如何。仰山云、此是顯大機大用。瀉山云、馬祖出八十四人、善知識、幾人得大機、幾人得大用。仰山云、百丈得大機。黄檗得大用。餘者盡是唱道之師。瀉山云、如是、如是。師因普請開田。回問、運闍黎開田不易。檗云、衆僧作務。師云、有煩道用。檗云、爭敢辭勞。師云、開得多少田。檗作鋤田勢。師便喝。檗掩耳而出。師問、黄檗、甚處來。檗云、山下採菌子來。師云、山下有一虎子。汝還見麼。檗便作虎聲。師於腰下取斧作斫勢。檗約住便掌師。至晚、上堂云大衆、山下有一虎子、汝等諸人出入好看。老僧今朝親遭一口。（宋・蹟藏主撰『古尊宿語錄』卷一）

【作例】

「黄檗虎聲」（某岡之繪『繪圖の林』卷下、元禄二年 [1689] 刊本）
「黄檗虎聲」（橋宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷六、貞享五年 [元禄一、1688] 刊本）

おうばくぜんし 黄檗禪師

黄檗希運禪師は閩（福建省）の人である。黄檗希運禪師の額に珠のような形が隆起し、声が朗々としている。幼い頃、地元の黄檗山に出家した。後に百丈清規禪師に師事した。唐の大中年間（847～860）、本山で亡くなり、諡は断際禪師という。

【出典】

洪州黄檗希運禪師，閩人也。幼於本州黄檗山出家。額間隆起如珠，音辭朗潤，志意冲澹。後遊天台逢一僧，與之言笑，如舊相識。熟視之，目光射人，乃偕行。屬澗水暴漲，捐笠植杖而止。其僧率師同渡，師曰，兄要渡自渡。彼即褰衣躡波，若履平地，回顧曰，渡來，渡來。師曰，咄，這自了漢。吾早知當斫汝脛。其僧歎曰，真大乘法器，我所不及。言訖不見。師後遊京師，因人啟發，乃往參百丈。「中略」唐大中年，終於本山，諡断際禪師。（宋・普濟撰『五燈會元』卷四，百丈海禪師法嗣）

おうばくだいぎご 黄檗大儀後

【作例】

「黄檗大儀後」〔画題があり、絵はなし〕（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷六、貞享五年〔元禄一、1688〕刊本）

おうばくどくごてい 黄檗毒打

【作例】

「黄檗毒打」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷五、貞享五年〔元禄一、1688〕刊本）